
私立青陵学園新聞部

金澤 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立青陵学園新聞部

【NZコード】

「3516」

【作者名】

金澤 樹

【あらすじ】

私立青陵学園高等部、小高い丘の上に建ち、周囲を桜の木に囲まれた美しい学園に僕こと安藤龍一は通っている。

幼馴染の山中隼人のお姉さん、山中美春ことみーちゃんに強制加入させられた新聞部。

今日も僕はスクープ探して東へ西へ。

部活動（不当な扱い）にもなれ始めたGW明けの時期にこれまた幼馴染の夏樹まで部活に入部しちゃって・・・。

王道学園ドタバタラブコメディー
超不定期連載

「先生！事件がないなら事件を起こせば良いんですよ！」

変な趣味なのかも知れないけど、僕は蛇花火が好きなんです。ショワワーッと赤色に変化して、なんともいえないグロテスクな動きをしながら灰色の炭に変化していく様子がたまらない。

というか蛇花火を考えた人が好きですね。

だつてあれつてどう見ても気持ち悪いじゃないですか。ヒット商品になるとは到底思えない。実際あんなもん別に好きじゃないって人は多いと思うんですけど、でも消えていつてしまふ事もなく未だに存在するでしょう？意外にファンが多いんじゃないかな。

なにを考えてそんなもん作ったのかについて2時間くらいの特番を組んだら絶対おもしろいだろうと思つて、テレビ局に企画案を送つたんだけど未だに返信が来ないんです。

きっと余程大規模なプロジェクトになつてしまつていて、計画の立案が遅れているに違いない、絶対そうだと今でも信じています。世の中には結構、本当ににを考えてそんなもん作ったのかいまいち理解し辛いものや、何でこんなもんが存在するのかあやふやなものつて沢山ある様な気がする。

才能に関してだつてそうですよ。

例えば米粒に絵とか文字を書く人がいますよね。

正直意味が分からない、普通に紙に描けよと思つときもありますけど、残念ながらそういうの僕は大好きだ。

テレビでも特集されるくらいだし、世間にも好きな人は多いんじゃないですかね。

あー、つまり何が言いたいかつて言うとですね、一見無価値、もしくはマイナスに見えるようなものでも、突き詰めていけば価値が見出せるんじゃないかなって僕は思うわけです。

絵が描かれた米 자체に価値は無くたって、そこに絵を描く人の技巧

や思考、努力にはきっと価値があるはずでしょう？

先生方がよくおっしゃる結果よりも過程が大事なんだっていうありますよ。

もー大賛成っ。その通りっ。世の中には結果が出なければ無意味だって言う人もいますけど、ありやーひねくれた物の見方ですよね。試合に勝たなければ苦しい練習に耐えてきた意味がありませんか？違いますよね。

その練習で鍛えてきたガツツや身体能力は那人から失われるものではありますんし、人間は敗北から学ぶ事だって多いじゃないですか。

甲子園で優勝できなかつたからといって高校三年間の青春は〇になつてしましますか？

違うでしょ？その人が大人になり、息子や娘に夢を託す事だってできるわけです。

泣ける話じゃないです。親子のスポーツ物語。自分では果たしきれなかつた夢を子どもが叶えてくれた瞬間の、厳しかつた親父の一筋の涙。息せき切つてスタンドから駆け下りてくる親父。もうその親父は甲子園の特番でも特集されるわけですよ。あの怪物投手を育てた親子の物語としてね。

そうして息子のところへ駆けつけ抱きしめてやりたいわけですが、親父はマスクに囲まれてしまうわけですよ。「お父さん！今の気持ちを一言！」「お父さん！全国のファンへむけて何かメッセージを！」と。親父は焦ります。こんな所で時間を潰すのではなく。一秒でも早く息子の所へいって、この感動を真っ先に息子へ伝えてやりたいと。

涙が止まらないわけですよ。親父は。喜びの涙だけではなく、こんな所で足を止めてしまう、世間体をきにする自分の老いが悔しくて、真つ青な空の下躍動した息子の若さが羨ましくもあるわけです。

親父は本当に不器用なんです。

グスツ・・・。

はやる気持ち、それを押さえつける自分の今までの人生。割れるようなスタンンドの歓声が親父の心をはやらせます。

だから、親父は自分の精一杯で答えるんですよ、マスク!!!。

「あの子が生まれてきた事の次に、嬉しく思います。全国の応援してくれた皆様に、息子に変わつて御礼を申し上げます、本当に、・・・本当にありがとうございます。・・・ありがとうございますっ！」

つてね。

ヒクッ・・・。

・・・そつ言つた次の瞬間、親父の背中から声が掛かるわけです。

「親父・・・」親父が振り返るとそこには・・・。

優勝投手の息子です。ナインとの喜びもそこそこ、きっと自分のもとへ走つてくれるであろう親父を探しにきたわけですね。ズズツ・・・。

辛く、苦しい日々だつた。

思い返せば親父に褒められた事などなく、いつも叱咤されてばかりだつた。

恨んだ事もある、何度も反抗して、投げる事をやめよつかと思つたこともある。

親父の無念を、俺に擦り付けるなよーと言葉を叩き付けた日もあつた。

それでもあの日、親父を初めて殴つたあの日。

夜中に一人で居間のちゃぶ台に座つて、黙々と自分のグローブの手入れをしている親父の後ろ姿を見たときから、息子は一切の文句を言わなくなつていたんです。

ウゥウツ・・・。

リトルリーグの頃から、仕事を休んでも親父は息子の試合の観戦を欠かした事は無かつた。気付けば、いつもグローブやバットはピカピカに磨き上げられていた。

毎日の仕事の後に、親父は黙つて息子の練習の為にボールのトスを続けるんです。

クリスマスのプレゼントはいつも野球の道具。初めて親父とキャッチボールをした時の喜び。

そういう思い出が一気に息子の中に駆け巡るわけです。

そして、息子は、涙を目一杯に為ながら、バットと頭を下げて一言叫ぶんですよ。

「ありがとう……ございましたっつー！！！」と。

そう……まるで……試合終了の時の挨拶のようですね……。

「……。

「……グスッ。」

部屋の中に静寂が満ちる。

向かい合つ一人の男がそこにいた。

僕と、葛西の一人だ。

安物のパイプ椅子が時折ギシッときしむ音と、丸い掛け時計が刻むカチッカチッという音だけが空間を支配していた。

窓から差し込む光は鮮やかな朱色に染まり、夕暮れ時の到来を告げている。

春とは言つてもまだまだ夜は冷え込むこの季節、徐々に下がつてきた室温と、一組の感動甲子園ストーリーにむせび泣く僕は、体の震えを抑える事が出来ずにいた。

「あー……、その、なんだ。」

葛西の野郎が困ったように頭をかきながら言葉を漏らす。

「……グースス。」

嗚咽を止められない僕。

「何故……こんな話になつた……。」

僕にもわかりません。

「・・・クスッ。」

「・・・濁点が無いだけでセリフっていうのは印象が随分と変わるものなんだな安藤。」

「・・・グズッ。」

「・・・トータルで濁点の数があつてりや良いってもんでもないと思つぞ、先生は。」

「・・・クズッ。」

「それは先生に向かつて言つて居るのかね安藤君?..」

「ただの鳴咽です。」

「そうか。」

再び沈黙。

きつと葛西も僕の話した物語に心の中で涙を洪水のように流してい るに違いない。

実際に涙の渦に巻き込まれて溺れてしまつたらこの説教も早く終わ つて助かるのに。

いや、でもその場合僕も葛西の涙の海のなかで溺れる」とになるの が。

40を超えたおつさんの涙で溺れ死ぬなど、僕の理想とする大往生 とは程遠い。

汚らわしいっ！

「先生・・・泣かないで下さいね。一生！」

「先生は君の脈絡の無い会話に心底驚いて呆然としているだけです。 といふか最後の一言に君の先生に対する感情の大半が込められてい るような気がしてなりません。」

「それは勘ぐりすぎといつものです。葛西先生大好き！」

「花も恥らう高校生に告白されるのは先生もドッキドキの急展開で すが、君の死んだ魚のような目をみた瞬間に現実の波に先生押し流 されてしまいました。といふか男×男の趣味は先生にはありません。 ご遠慮願います。」

「そうですか、男は引き際が肝心だと死んだじつちやんが申してお

りました。涙を呑んでこの身を引くと致しましょ。でわ、これにて失敬、あーらよつとくりやあつ。」

「待てい 安藤。勢いに任せて逃げようとするんじゃない。」

「逃げるなんて失敬な。先生は僕を負け犬か何かだと勘違いしてやしませんか?」

「負け犬ならまだ躊躇がしやすいんだけどな、安藤の場合はさかつてる発情期の犬だな。」

「ひどいっ！人権侵害だ！」

「おやすまん、先生つい本音が・・・。」

「教頭先生にいいつけてやる！」

「教頭先生が仰つてました。」

「だから大人つて嫌いだ！」

まあそれは置いといて、と葛西が咳払いをひとつ。

僕としては徹底的に追求と糾弾を行い、現状を打破する原動力のひとつとして今の話題を掘り下げて録音し、マスクミニにリーグする事を所望したのだが残念ながらボイスレコーダーは鞄のどこを探しても出てこなかつた。ので諦めて息を呑む演技に全力投球する。

「山中と共に深夜の校舎に忍び込み、春だというのにロケット花火計80発、ネズミ花火計30個を着火しまくった挙句、屋上で打ち上げ花火まで40発ほど打ち上げた事に対する追求を改めて再開しようじやないか。」

「あらやだ青筋。先生。額にミニズが入つてますよ？」

ドオオオオオン！と激しい音と共に目前の机に叩きつけられた竹刀に、僕は今日の帰宅はお天道様には見届けてもらえまいと胸中むせび泣いた。

「先生一校内暴力ってどこで電話すれば解決して貰えますか！？」

私立青陵学園高等部、小高い丘の上にたち、その周囲を桜の木に囲まれた美しい校舎を誇りとして文武両道をモットーに掲げる僕の母校だ。

平和、といったら聞こえが良いけれど、まあようするに特に面白味が無いと言つてしまえばそれまでかもしれないこの母校は、一応地域の進学校という事になっているらしい。

鬼のような両親の叱咤激励に半ば無理やり、といった感じで青陵学園に押し込まれた僕は、

正直落ちぶれていく自分の未来が目に映るようで日々戦々恐々として震え、毎晩枕を涙でぬらしている。のは、まあ冗談だけど、正直今まで地域の中学校ではなんとか上位をキープしていた成績が震んでしまうほどの周りのレベルの高さに、辟易しているのは事実だ。僕と共に青陵学園へと入学した山中隼人は幼稚園の頃に僕が引っ越して来て依頼の幼馴染であり、親友。

これがまた腹立つほどのイケメンで、正直いつかはグーで顔面を陥没させてやろうと思つていてるんだけど、空手の段位もちのヤツに死角は無い。早く原付の免許でもとりたいもんだ、金属の塊にはさすがに適うまい。

そんで、まあ、問題はヤツにもあるんだけれど、それ以上に・・・

「あら龍くん、昨日は失敗しちゃったのねえ？」

と部室に一コヤカに入ってきた隼人の姉さんが一番の問題な訳でし
て、ええ。

「みーちゃん・・・、やつぱ計画に無理があつたんじゃないかとおも グウツ！？」

メリメリ、と良い音を僕のこめかみが奏でる。オヤおかしいな、いつからコメカミってのは音が出るようになつたんだ、と冗談が口をつかない程の威力のみーちゃん伝家の宝刀アイアンクローが炸裂した。

「み、みーちゃん・・・、ミ、ミス青陵がアイアンクローなんかしちゃ、い、いけな、グオアア！」

「あら、龍くんって本当にお世辞が上手いんだから。お姉ちゃん照れちゃうな。」

「て、照れるようには思えな、ピギィイイイ！」

「い、いたいよー・マジデイタイヨー！」

「やだな、龍くん。そんな豚の真似なんかしてお姉ちゃんを喜ばせよつしてくれなくたって、お姉ちゃんは龍くんと一緒に居られるだけでとっても幸せだよ？」

「ウ、ウソダ、ギャアアアアア！」

頭蓋骨まで砕けてしまえと言わんばかりの恐ろしい握力を惜しみなく披露してくれる山中美春」と「みーちゃん」。昨年、僕らが入学する前の学園祭で行われる『ミス青陵』において一年生ながらも堂々の一位を勝ち取り、成績においてもトップを独走する才色兼備の2年生。

噂では一日につきみーちゃんにアタックをかける男の数は5人を下回った事が無いとされ、おいそれもう全校生徒足しても足りてねえよみたいなツツコミも信憑性を搖るがせない程の人気を誇る、いわゆる全校生徒の憧れの的だ。

確かにまあその見てくれやステータスだけを見れば、僕だつてみーちゃんがモテルのも頷ける。

少し切れ長な目に見つめられると思わず見惚れてしまうのは、まあ否定できないし、時々長い髪をかき上げる仕草なんかは異常に色々

ぽい。どこが、と明確に言及するのは避けるとしても破壊力のある体つきも直視に耐えない（誤用）。

およそ美人としての条件をほぼ完璧に網羅しているんじゃないかと思われるみーちゃんであつたが、外面と反比例するように隼人や僕に對しては傲岸不遜、天上天下唯一獨尊、お前の物は私の物私の物は言わずもがな私の物、ワンと鳴いて三回回つて私の靴をおなめなさい、という傍若無人な態度に終始している。

それで、なにを考えたのか分からぬけど、全校生徒の注目的であるみーちゃんは今年、隼人や僕が入学すると同時に、今までのありとあらゆる部活の勧誘を断り続けていた態度を一変させ、青陵学園では数年前から存在を消していた新聞部を復活させた挙句、隼人と僕を強制的に入部させた。

なんていきなり新聞部なのかはよくしらないが、一度不思議に思つて尋ねたときに悪魔のように唇を吊り上げて見つめてきたので一目散に逃げ出して以来謎に包まれている。

しかしそれを取り立てて取り柄も無かつた僕としては、心置きなく接する事ができる隼人やみーちゃんと部活動することに抵抗は無かつたんだけれど、よりによつて隼人が逃げやがつた。くそあの野郎。青陵学園では部活の掛け持ちも特に禁止はされていないのをいい事に、空手部へ浮氣していつこうに新聞部へ顔を出さないのだ。僕らの友情はそんなもんだったのかい！？と詰め寄つたものの「俺はあの姉貴と1時間以上同じ空間で過ごすと犬に変身してしまう呪いに掛かっているのだ。あいつは悪魔なんだ。サタンだ、サキュバスだ、ベルゼバブだ。気をつけろ龍二。お前も、死ぬぞ。」と真面目な顔をしてのたまうものだから、しつかりみーちゃんに情報をながしてやつた。翌日隼人が入院したというニュースがまことしやかにクラスを駆け巡つたのは何でだろう、不思議でしょうがないぜ。それでもまあ不本意ながら（周りの男どもには羨ましがられているが）みーちゃんと二人きりの部活動に従事する事になつた僕は、日夜スクープを求めて校内を駆け回る事になつた。

しかしまあ平和がモツトーなんぢやねえの？と疑問に思つよつた学園内においておいそれと事件など起こりようがあるはずもなく、紙面が埋まらない事を嘆ぐ「デスク」とみーちゃんに「龍一」、スクープを作つてきなさい。」と犯罪命令を受け実行する事とあいなつたのである。

「む、むりだよ、グギギ、や、やりすぎだと思つていつたじゃな、
グゲゲゲゲ。」

「あら、計画は完璧だつたわ。本当だつたら今日の学園の話題は深夜に校舎内で花火を打ち上げたお馬鹿な犯人の事で盛り上がりつたはずなもの。それを一面記事として取材する新聞部。ミス青陵の発行する新聞として注目の的だつた青陵学園新聞の評価は右肩上がりで皆が我先にと掲示板へ殺到するわ。」

「む、むちやある・・・ブギギギギッ！」

「そして回を追う毎に真相へと迫つていく新聞記事、高まる緊張感、手に汗握る展開に皆は固唾を呑んで文字を追うの。」

「し、真相に迫つたらば、ぼくが・・・アガガガガガガ！」

「そして・・・遂に真犯人が浮かび上がるのよつ！」

「僕を売る気満々じやないかつ！」

駄目だ！この人駄目な人だ！目が、目が陶酔している！

「私は謝罪会見を開くの。私が、私がしつかりといななかつたのが悪かつたんです。心の優しい子だと、・・・思つていたのに。こんな、こんな事になるなんて・・・。」

「それがやりたいだけだなつ！わかつたぞ！あんた僕をダシにして遊びたいだけなんだなつ！絶対そうだなつ！」

「・・・今更？」

「何故そこで哀れむような目を！？」

くそー！この人駄目だ！僕の事を完全におもちやとしてしか認識してない！良いのか！良いのか安藤龍一！人として生まれ、龍のようなくましく育つて欲しいと親に願われて生きてきた龍一よ！こ

のままみーちゃんのおもちゃ（飽きて捨てられるタイプ）として花の高校生活を終えてしまつても良いのか！？いや！よくない！打ち消し分的な感覚でもつてして宜しくないぜ！なんとか・・・なんかこの人をギヤフーンといわせ

「ギヤフーン」

「僕の心を読むんじゃねえ！」

みーちゃんがアイアンクローラーをやめて不敵に微笑む。グムウ、ずきずきするぜ。正直脳に多大な影響を与えている可能性が高い。帰りにシートをとつていかなければいけない。今すぐにでも近場の脳外科に電話を

「林脳外科に6時から予約をとつておいたわ。」

「僕の行動を読むんじゃねえ！」

フフン、とみーちゃんは鼻で笑つて、安物のパイプ椅子に腰掛けている僕の背後に回りこんでくる。スカートの裾のひらめきに目がいつてしまつのは生物としての本能だ。決して、この人を女として認識してはいけない。命に関わる。

「龍くんの考えている事ぐらい、なーんでもわかるけどね？」

「へ？」

フワリ、と音のしそうな柔らかな動きで、みーちゃんが僕に後ろから抱きついてきた。

・・・H e ?

「今回は、失敗しちゃつたから。」

みーちゃんの、なんつーか柔らかいものが背中にあたる。

「たゞつぶり。」

甘い香りが鼻腔に満ちて、なんかムズムズする。

「もう二度と。」

耳にあたる息がくすぐつたい。

「忘れられないくらい。」

頭の中がみーちゃんで一杯になる。

「おつねめーつてあがなくりやね。」

絶望した。

みーちゃんの的確なチョークスリーパーが僕の首に炸裂した。
おしおきつて、アイアンクローラーで十分じゃないの?と雲の上で神様
がさめざめと涙を流す姿が見える。

望む。

また初チコリすらしたことねえ
来るなよ！絶対に来るなよ！？

「・・・あなたたち、何してんの？」

そうして全校男子生徒と一部女子からも恨みをかいそうなシチュエーションでみーちゃんにもみくちやんがそれでいたまさにそのとき、ガラツと開いた部室の扉。

涙腺が崩壊してにじむ視界の隅に映つたのは、幸いな事に神様に派遣された僕を哀れみ涙する天使ではなく、不幸な事にもう一人の幼馴染、羽賀夏樹、その人でだつた。

勘弁してくれ！！！！

神様！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516j/>

私立青陵学園新聞部

2011年1月28日05時39分発行